

地球を墳墓として (散文詩)

序

私は 私の魂に物語る――

朽つ可きものは 朽ち果つれば善いのだ。

私は地球に対して 最大の憤懣を持つ。それは私に取つては殆ど堪えられない程度のものである。

人類は地球が生産した大きな謎である。地球は人類を産んだことを悲しんで居る。地面を荒したものは人間である。あゝ 私は それを呪ふ。

私がもし 神であれば 地球の心にダイナマイトを仕掛けて 木葉微塵に打ち砕いてゐるかも知れない。それほど 私は人類に愛想をつかしてゐる。

それでも 私の神は まだ愛想もつかさず、愛の爲めに 私等人類を嚇し支へ 亡ぼしもしないで置いてくれる。

かうした心持ちで、私は 地球を葬つて、更に大きな世界に延び上らう。

いらだたしい心持ちで、私は私の魂を見詰め、人類のあまりに醜い姿に泣けてくる。さらば わが魂よ 延び上れるだけ延び上れ！ 自己を葬り 地球を葬り おまへの死力をつくして 神にまで延び上るが善い。自己に愛想をつかさない間 他人に愛想をつかさぬが善い。救はんとする強き意志に出発しよう。私は地殻の中に竦む。今 地球は私の墳墓である。然し 時しあらば また外殻を打破つて甦るであらう。

わがいらだつ魂に 静かなる神よ 臨み給へ！ 瞑想の滴りにわが乾きたる魂を潤ほせ！ 争闘の後に 争闘が生れ 歐洲戦乱の後に太平洋の波が赤くなりさうである。

かうして 碧波を血の色に塗り換へ 地球を屍で埋めても 遂に人は神を見ないであらうか？ おゝ 狂へる魂よ！

私の墳墓は血に染められた地球だ。私はまた嘆きの子に復帰する。悲しみの日が、また私に近づく。私は十字架を覚悟して 狂へる人々の中を行かう。地球よ 口を開いて 私がおまへの懐に還る日を待つがよい。さらば 民衆よ 私の墓場を準備して呉れ！

(一九二四・六・一一 東京本所松倉町バラックにて)